瞑想自省録2025-③

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025.3.2５

      「１」 妻の「傘寿のお祝い」（2025.3.22土曜日）

　　　妻京子の誕生日が３月１９日。

藤井家９名（長女家族　孫息子二人で４名。長男家族　孫娘一人で３名。）で京子の傘寿のお祝いをした。

ローストビーフの店、鎌倉山本店。風光明媚な丘陵地で、桜にはまだ早かったが、天気は快晴、風情のある庭園。

プロによる写真撮影。シャンパンで乾杯、全員が一言お祝いの言葉。

その中での印象的な言葉は、孫息子の「今回のお祝いの準備でたくさんの昔の写真を拝見しましたが、歴史というか、自分が生まれた縁を垣間見ることができ、感激を覚えました。これまで人生を歩んでくれたことに心からの感謝と尊敬を申し上げます」。であった。

考えれば不思議な縁というか、運である。

１９６８年私達は知り合って結婚した。その時の世界人口は約３０億人（現在８０億人）、日本の人口は１.０１億人(男、４９１００万人)であったが、その中の二人が出会い、子供が産まれ、子孫へと繋がっていく。

不思議な自然の摂理である。

　　　私の挨拶は、「心身ともに健やかな京子。傘寿、80歳。心からおめでとう、有難う。結婚５７年、あなたの内助の功が大きく、私達の人生は合格（大成功）と言えるでしょう。

これからも支え合って「明るく楽しく爽やかに」人生を送りましょう。」

それに続けて、私の反省を伝えた。私は、仕事に邁進して、家事を全く

手伝えなかった、　あるいは手伝う意思がなかったと言っていい。

私の育った世相も反映して、「男は台所に入るべからず」という母親の言葉をいいことに、「主婦の仕事がいかに雑用が多く、単調な反復の中で永遠に繰り返されること」を意識しなかった。

ギリシャ神話の「シシュポスの神話」（シシュポスは古代ギリシアの都市、コリントスの創始者であるが、その聡明さのゆえに、ゼウスに憎まれ、地獄に落とされ、転がり落ちる大岩を山頂にまで持ち上げる作業を永遠に繰り返す刑罰に処せられる）に例え、主婦の仕事がシュシュポスと同じである事を

語った。

私も含め、息子二人は各々の事情・環境におうじて、伴侶をサポートしないといけない事を自戒を込めて挨拶した。そして二人に「内助の功」がいかに大きいかを　認識する事を求めた。

その感謝の意味を込めて、長女、息子の伴侶に贈り物をした。

　その後、スライドの写真を見ながら、ワイワイガヤガヤ。楽しく、名残惜しく散会したが、後はラインでお互いに写真と感想のやり取りが続いた。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　写真別送。

　「２」　成瀬巳喜男監督「めし」。傘寿のお祝いの夜に観る。

　　　傘寿の祝いを終えて、帰途息子に送って貰って5時に帰宅。そのままワールドウィングで身体をほぐす。

軽く食事を終え、ゆったりと映画を観ることにした。

録画してあるリストから、どのような筋書きかも知らず、なんとなく「めし」を選択した。

　　　「めし」は林芙美子の未完の絶筆が原作である。

時代は１９５１年。私が11歳の時。日本がまだまだ貧しい時代。

　　　結婚５年目、倦怠期を迎えた夫婦。些細なことから、違和感と不信感を覚え、なんとなく溝が深まっていく。真面目だが、優柔不断。面白みのない夫。証券会社の中堅サラリーマン。月給八千円。いつもお金に困り、やりくりに苦労する妻。

　　　妻は、日常に苛立ちを覚え、「私の人生とはなんだろうか？　このままでいいのか？」と疑問を感じ、実家に戻る。

　　　上原謙と原節子の当時の美男美女が　貧乏な平凡なサラリーマン夫婦を淡々と好演。

　　　実家に戻った後、どのような結末になるか？　林の原作では未完のため結末に至っていない。

現代的な発想では、離婚かなとも想像したが、夫は全く悪気がない。

そのような夫に対して妻はほのぼのとした愛情を思い起こし、元の鞘に戻る。

　　　なんとなく、やるせない哀感が漂う。タイムスリップして案外引き込まれて観ていた。

　　　この後、日本は著しい経済成長を見せていくことになり、次第に　夫は猛烈サラリーマン、妻は専業主婦で内助の功となっていったのだろう。

私の時代はその最たるもので、猛烈会社人間の父親の背中を見ていた私達の息子、今の５０代にも多かれ少なかれその風潮が残っているのだろう。

私が、妻の「傘寿のお祝いの会」で述べたように、私も、私の息子達もそれを強く認識、変わっていかないといけないのだろう。

　　　その次の世代、３０、４０代は　ワークライフバランス時代で、妻の権限が強くなってきているようだ。夫は家族を顧みて、育児に参画、財布の紐は妻が握る。家事も分担。

妻がキャリアウーマンなら当然だが、専業主婦なのに、家事、育児は完全に分担、財布のひもは妻、妻関白の家庭も増えてきつつあるようだ。

夫婦の問題は夫婦にしかわからないと言われるが、夫婦間の力関係もあるのだろうが、昭和育ちの私にはその感覚・意識には違和感を覚える。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上